

A44a ぐんま天文台における観測活動の特長と様々な連携

橋本修、本田敏志、田口光、高橋英則、衣笠健三、古在由秀(ぐんま天文台)

150cm 望遠鏡を主力とするぐんま天文台は純粋な研究機関ではなく、一般公開や教育活動の機能も持ち合わせた公開天文台である。それが故に望遠鏡の全ての時間を研究観測に用いることは許されない。しかし、共同利用体制を採用していないために観測時間を柔軟に運用する事ができ、突発天体に即応した速やかな観測や、小数の課題に観測時間を集中させることによって、大規模なデータサンプルの取得や変光星の時間変化を長期にわたって追跡すると言った、他の天文台とは一味違ったユニークな観測研究を実践することが可能である。ぐんま天文台における気象やシーイングなどの環境は必ずしも観測にとって理想的な条件ではないが、高分散分光器 (GAOES) や赤外線観測装置 (GIRCS) に加え、ガンマ線バーストの光学同定などに速やかに対応できる低分散分光/撮像装置 (GLOWS) を開発、設置し、現実の観測環境の下で望遠鏡の性能を十分に利用するとともに、ぐんま天文台の運用上における独特な性格も最大限に活用できるような体制をとっている。

また、このようなぐんま天文台での観測の特性を積極的に活用するため、恒星の観測を主体とした研究や関連する教育活動を、地域の群馬大学や放送大学をはじめとする幾つかの大学や研究機関と共同で実行している。このような連携活動は国内のみに留まらず、2002年にバンドン工科大学と相互協力協定を締結しているインドネシアの他、アジア地域を中心とした様々な国々とも共同での観測研究や各地の天文学の発展に向けた事業を、ぐんま天文台の基本活動の一部として展開しており、近年の発展が目覚ましい東南アジア天文学ネットワーク (SEAAN) との関連も深いものとなっている。